

大正・昭和前期の家事科教科書における 「食卓での家族団らん」

表 真 美

(京都女子大学発達教育学部)

原稿受付平成 18 年 3 月 20 日；原稿受理平成 18 年 12 月 2 日

Transition of “Home Circle with Having Family Meal Together” Described in the Home Economics Textbook at the Taisho Era and the Preceding Term of Showa Era

Mami OMOTE

Faculty of Human Development and Education, Kyoto Women's University, Kyoto 605-8501

The purpose of this research is to clarify the influence of Home Economics education on “pleasure of happy home around the dinner table.” Fifty-five articles on happy family get-together were extracted from the home economics textbooks published in Taisho and Showa eras (1920s to 1930s). The results of the analysis of the above articles are as follows: Many descriptions of the conditions and functions realizing the happy family get-together around the dinner table were found in the 1920s. However, they ceased to appear in the textbooks from 1929 onward and morality was increasingly emphasized instead such as the role of meal in sound family and how the housewife should be and do. It is interesting to note that the articles on “happy family get-together around the dining table” were closely related with the popularization of CHABUDAI or low collapsible dining table. The textbooks published in the war structure stressed the importance of “happy family get-together around the dinner table” as if to supplement the poor supply of food with morality. In other words, the home economics education was given on a war footing.

(Received March 20, 2006; Accepted in revised form December 2, 2006)

Keywords: home circle 団らん, having family meal together 共食, Taisho era 大正期, preceding term of Showa era 昭和前期, Home Economics textbook 家事科教科書.

1. 緒 言

食事の共有は家族の重要な共同行動の一つである。これまでの実証研究によると、食卓でのコミュニケーションのあり方が重要な鍵を握るものの、家族の食事の共有が家族関係や子どもの発達にプラスの影響を及ぼすことが報告されている（小西と黒川 2000；平井と岡本 2001；川崎 2001 など）。

しかし、石毛直道らは、家族が1つの食卓を囲み、楽しく会話しながら食事をするようになったのは、戦後以降であることを、聞き取り調査から指摘する（石毛と井上 1991）。食事の場での家族団らんの実現には、さまざまな要因が影響を及ぼしたと考えられる。物理的要因として家族が食事に揃う時間的余裕、個人の膳

からチャブ台・テーブルへの移行、家族が集まりやすい食事室などの空間的要因、食事内容、また、家族揃った食事を支える主婦の存在があげられる。さらに、国家の家族政策は、学校においての教育という形で人々に普及されていった。家族の食事に関する領域を含む家事科・家庭科は、教育を通して、「食事は家族揃って楽しく食べるべき」という国民の意識形成に少なからず影響を及ぼしたと考えられる。

家事科教科書における「食卓での家族団らん」に関するはじめての言説は、明治 22 年の村木経策著『家政要旨』にみられる（表 2001）。また、明治期高等女学校家事科検定教科書の多くが、食事場面での団らんについて述べている。ホーム論に影響を受けた民主主

義的記述と、家規範を強調する国家主義的記述の両者が認められた(表 1998)。

大正期、工業化にともなって都市には雇用者が増加し、核家族化が進んだ。新中間層が、銘々膳にかわって、チャブ台を日常の食卓として採用し始めた。チャブ台の普及は、都市生活者のあいだでは大正末頃までに、農村部では1934(昭和9)年頃が切り替えのピーク時期とされる(石毛と井上 1991; 石毛 2005)。家族が揃っても食事の会話が禁止されるケースが多かった(石毛等 1991; 熊倉 1999)ものの、チャブ台が普及した大正期から昭和前期は、戦後の「食卓での家族団らん」実現期に向けて、食事は家族揃って楽しく行いうべきという家庭啓蒙が一般庶民に普及・定着した時期と考えられる。小学校にも家事科が置かれるようになるとともに、高等女学校への就学率も上昇し、家事科教科書に接する児童・生徒が急増したのも、大正期から昭和前期である。大正期から昭和前期の家事科教科書の記述を明らかにすることは、家事科・家庭科教育が「食卓での家族団らん」実現に及ぼした影響を探る上で、重要な鍵を握ると考えられる。

常見育男による家庭科教育の歴史研究以降(常見 1959)、大正から昭和戦前・戦中期における家庭科教育の研究は少なく、裁縫科に焦点をあてたものが中心である(田中 2003 など)。明治・大正期高等女学校の家事科教科書を対象に「時間教育」を明らかにした研究があるが(佐藤 2004)、「食卓での家族団らん」に着目した研究はみられない。

そこで、大正から昭和前期にかけて発行された文部省著作の家事科教科書において、食事場面での団らんがどのように扱われていたかを明らかにし、時代背景との関連を探ることが、本稿の目的である。尚、本稿では、「昭和前期」を昭和2年から終戦直後の昭和21年までとする。

2. 大正から昭和前期の家事科教育と家事科教科書

小学校の家庭科教育は、明治期は一時的に家事科が設置されたものの、ほぼ一貫して裁縫科のみであったが、1911(明治44)年、小学校施行規則中改正により、高等小学校理科の内容に、「女 家事の概要」が加えられた。週3時間のうち女子のみ1時間が「家事」にあてられるようになり、いわゆる「理科家事」の時代が始まった。1919(大正8)年の改正では、高等小学校の女兒に「随意科目又は選択科目」として「家事」が課される。家事は小学校の教科として独立し、「衣

食住・看護・育児・其他一般ノ経済等ニ関スル事項」を取り扱うことになった。さらに、1914(昭和16)年、国民学校令公付後は、裁縫科・家事科は芸能科の一教科となり、内容に大きな変化はないものの、家事は「芸能科家事」として高等科において裁縫と合わせて週5時間があてられることとなる。

一方、高等女学校においては、1985(明治25)年の高等女学校規定当初から、一貫して家事が課されている。また、1910(明治43)年の高等女学校令中改正により、家政教育に重点をおいた実家高等女学校の設置が認められた。1943(昭和18)年、高等女学校は5年制がなくされて4年制となり、実家高等女学校は廃止された。従来の「裁縫」「家事」は再編されて「家政」となり、「被服」「家政」「育児」「保健」の4科目にわけて課されることになり、戦時体制化における必要性から、「育児」と「保健」の重視が強調された。

青年学校は、1935(昭和10)年、徴兵年齢前の男子青年に軍事訓練を課すことを主目的に発足した。女子においては、これまでの専門的裁縫科を偏重した教育を改め、家事・裁縫は同じ教師によって、堅実な家庭生活を営む能力を養うことを目的としていた。

1872(明治5)年の学制制定後、自由発行、自由採択制を経て、長く検定制であった教科書制度は、1904(明治37)年から、国定制が実施されていく。しかし、国定教科書の歴史は教科による違いがみられ、小学校においては、小学校令中改正により、「校長の判断で児童に教科書を使用させなくとも良いが、使用の場合、ならびに教師用は文部省著作本に限る」とする教科に1911(明治45)年から理科、1919(大正8)年から家事が加わり、1914(大正3)年から理科家事教科書が発行された。理科家事の児童用教科書は使用が自由であったが、毎年平均20万冊以上が発行されている(佐々木 1993)。

また、高等女学校家事科においては、1943(昭和18)年までは検定教科書が使用されており、その後文部省著作のみとされた。第2次大戦期には、小学校から師範学校に至るまで、教科書は文部省著作本に限定された。終戦直後には、戦時中に製作された文部省著作教科書を応急に修正した、いわゆる暫定教科書が作成され、1947(昭和22)年は、新たに編纂された文部省著作教科書が発行された(常見 1959; 小笠原 1971; 佐々木 1993)。

3. 方 法

本研究が対象とした家事科教科書は、大正から昭和18年発行の高等女学校向け家事科検定教科書、および文部省著作の家事科教科書である。

対象とした高等女学校向け家事科検定教科書は表1のとおりである。佐々木享による民間で著作された戦前の家事科検定教科書リストより、高等女学校向けのものを抜き出し、再販本を除くと46種となった(佐々木1993)。このなかで、日本家政学会著『日本家事教科書』(1930)の上巻が全国の図書館蔵書に見出されなかったため対象からはずした。また、佐々木によるリストにおける著者(編者)の「実文館編集所」は「宝文館編集所」(資料番号31)、書名の『総合家事教科書』は『統合家事教科書』(資料番号34)が正しいことが判明した。表の中の発行年は、検定修正後の発行年を示している。45点の内25点を国立教育政策研究所図書館(資料番号2・4・5・7・11・12・17・18・19・20・21・25・26・27・28・30・33・35・36・37・38・39・41・42・44)、14点を東書文庫(資料番号1・3・6・8・9・10・14・15・16・22・23・24・29・45)、4点を東京家政学院大図書館大江文庫(資料番号13・31・40・43)、1点を大阪市立大学図書館(資料番号34)の蔵書、および1点は古書店から入手した原本(資料番号32)を利用した。

対象とした文部省著作教科書10点は表2のとおりである。対象教科書はすべて大空社による復刻版を用いた。

いずれも、食事場面での家族団らんに関する記述を抽出し、記述における特徴的内容を析出、分析した。

4. 結 果

(1) 大正から昭和18年発行の高等女学校家事科検定教科書

対象とした教科書の多くは、上巻には総論と住生活、衣生活、食生活、下巻には養老、育児、看護と家庭経済、家庭管理といった構成であり、明治44年の「高等女学校及実家高等女学校教授要目」の「家内ノ整理 家事衛生 飲食物ノ調理 育児 養老及看病 家事経済 家計簿記」に準拠している(文部省教育調査部1941)。食事場面での家族団らんに関する記述は、住生活領域と食生活領域から抽出された。総論や家族・家庭経営領域においては、「一家団らん」の奨励はみられるものの、食事と結びつけて述べられたものは抽出されなかった。

抽出された記述は、食卓での家族団らんを行う要件に関する内容と、食卓での団らんの機能に関する内容の2種となる。食事場面での家族団らんに関する記述は、住生活領域の住宅各室の設備などについて説明する項目のなかの、食事室(食堂・茶の間・居間)の説明の部分より多く抽出されている。このなかから、食卓での家族団らんの要件として①食事室の条件に加えて、②食卓の奨励、③食堂と居間との兼用、機能面では、④子どもの教育について述べる特徴的記述内容を析出した。

また、食生活領域では、「食卓での家族団らん」に関する記述は、食事の意義、献立、あるいは食事全般の注意点を述べた項目から見出された。このなかから、要件として、①家族の団らんのために嗜好を満足させる献立を考慮すべき、②1日3回の食事のうち1回は家族揃って団らんすべき、③食事時刻を一定にすることが、家の規律とともに、家族の団らんにとって利益をもたらす、④主婦の心尽くしが重要、機能面では、⑤食事の精神的機能に言及、⑥家族揃った食事において子どもの教育を行うべき、⑦家族揃った楽しい食事は消化を助けるといった7つの特徴的記述内容を析出した。

以下、その詳細について述べる。

1) 住生活領域における記述内容

多くの教科書に、「茶の間は一家団楽して楽しく食事し談話する室なれば、通気・採光共に充分にして庭前に向ひ晴れやかなる所たるべし。備品として茶箆筥・長火鉢その他飯台を設け置き、家族相共にして之を擁して食事し、食を茶菓を取ることとせば、簡便にして又慰安の方法となるべし。(資料番号10:上巻・第二編住居・第二章室内の設備と装飾・一、諸室・(4)茶の間(食堂), p.42, 大正5・1916年)」といった記述が見出された。

これに加えて、銘々膳にかわって食卓を奨励する記述内容が多かった。「とくに食堂といふ程のことはなくとも、従来の茶の間に卓をおき椅子を備ふるか、或は飯台の適当なるものをおき、家族彼を囲みて食事をなさば、団楽の樂を得べく、又一人づつ配膳するの労を省き得て便利なるべし。(資料番号4:上巻・第二編住宅の整頓・第二章室内の設備・食堂, p.57, 大正2・1913年)」といった記述が複数みられた。多くは、家族の団らんとともに、食事にかかる労働の合理化と結びつけて述べられていた。

また、食堂と居間との兼用を奨励する記述内容の例

表 1. 対象高等女学校家事科検定教科書

資料番号	書名	著者	発行年	発行者
1	家事新教科書	2冊 戸野みちえ	1913 (T 2)	大葉久吉
2	女学校用家事教科書	2冊 竹島茂郎	1913 (T 2)	渡辺滋
3	新撰家事教本	2冊 塚本はま	1913 (T 2)	金港堂書籍株式会社
4	新定教科家事教本	2冊 吉村千鶴	1913 (T 2)	西野虎吉
5	最新家事教科書	2冊 佐々木君代	1914 (T 3)	大日本図書株式会社
6	実地応用家事教科書	2冊 吉村千鶴	1914 (T 3)	西野虎吉
7	実用家事教科書	2冊 美島近一郎	1915 (T 4)	株式会社啓成社
8	新定家事教科書	2冊 吉村千鶴	1915 (T 4)	西野虎吉
9	新撰家事教科書	2冊 小谷野千代	1916 (T 5)	松邑孫吉
10	最新家事教科書	2冊 溝口鹿次郎・土岐安	1916 (T 5)	直井潔
11	家事新教科書	2冊 石沢吉麿	1917 (T 6)	石井清
12	大正家事教科書	2冊 開成館編集所	1917 (T 6)	西野虎吉
13	応用家事教科書	2冊 大江スミ	1918 (T 7)	大葉久吉
14	新定家事教科書	2冊 甫守ふみ	1919 (T 8)	岩田僊太郎
15	近世家事教科書	2冊 後閑菊野・佐方鎮	1920 (T 9)	河出静一郎・目黒甚七
16	新定家事教科書	2冊 戸野みちえ	1920 (T 9)	大葉久吉
17	家事教科書	2冊 家庭経済研究会	1924 (T 13)	外松荒三
18	現代家事教科書	2冊 東京開成館編集所	1925 (T 14)	株式会社東京開成館
19	現代家事教科書	2冊 井上秀子	1925 (T 14)	合資会社文光社
20	最新家事教科書	2冊 大日本図書株式会社	1926 (T 15)	大日本図書株式会社
21	総合家事教科書	2冊 家事科資料研究会	1926 (T 15)	株式会社文献書院
22	実際的事教科書	1冊 河口愛子	1927 (S 2)	河口愛子
23	現代家事	2冊 甫守ふみ	1927 (S 2)	岩田僊太郎
24	家事新編	2冊 西野みよし	1927 (S 2)	合資会社文光社
25	新編家事教科書	2冊 近藤耕蔵	1927 (S 2)	上原才一郎
26	新編家事教科書	2冊 竹島茂郎	1928 (S 3)	目黒甚七
27	最新家事	2冊 倉橋惣三他	1928 (S 3)	合資会社富山房
28	新時代家事教本	2冊 越智キヨ	1928 (S 3)	星野敬一
29	現代家事教本	2冊 甲斐久子	1929 (S 4)	星野敬一
30	昭和家事教本	2冊 家事教授研究会	1930 (S 5)	合資会社文光社
31	標準家事新教科書	2冊 宝文館編集所	1930 (S 5)	大葉久吉
32	綱要家事教科書	2冊 日本家政学会	1930 (S 5)	大日本図書株式会社
33	中等教育家事新教科書	2冊 奈良女子高等師範学校佐保会	1931 (S 6)	加島幸
34	統合家事教科書	2冊 市川源三	1932 (S 7)	株式会社弘道館
35	昭和家事教科書	2冊 三省堂編集所	1933 (S 8)	株式会社三省堂
36	中等教育家事教本	2冊 東京開成館編集所	1933 (S 8)	株式会社東京開成館
37	実用家事	2冊 甫守ふみ	1934 (S 9)	岩田僊太郎
38	実践家事新教本	2冊 西田博太郎他	1935 (S 10)	株式会社東京開成館
39	簡明中等家事	2冊 井上秀子	1937 (S 12)	合資会社文光社
40	新式家事教本	2冊 家事科学研究会	1937 (S 12)	株式会社東京開成館
41	新撰家事教科書	2冊 倉橋惣三他	1938 (S 13)	合資会社富山房
42	新日本家事教科書	2冊 山崎犀三・有本邦太郎	1939 (S 14)	林澄
43	聖代家事教本	2冊 越智キヨ	1940 (S 15)	星野敬一
44	実践家事提要	2冊 山崎犀三他	1940 (S 15)	林澄
45	家事一	1冊 中等学校教科書株式会社	1943 (S 18)	中等学校教科書株式会社

大正・昭和前期の家事科教科書における「食卓での家族団らん」

表 2. 対象文部省著作教科書

資料 番号	対象学校	教科書名	発行年	時代 区分
46	高等小学校	高等小学理科家事教科書 第1学年児童用 第2学年児童用 第3学年児童用	1914 (T 3) 1915 (T 4) 1917 (T 6)	A
47	高等小学校	高等小学家事教科書 第1学年児童用 第2学年児童用 第3学年児童用	1933 (S 8) 1934 (S 9) 1936 (S 11)	A
48	国民学校	高等科家事 (上)	1944 (S 19)	B
49	国民学校	高等科家事 (第1・2・3学年用)	1946 (S 21)	C
50	高等女学校	中等科家事一	1943 (S 18)	B
51	高等女学校	中等家事一・中等家事二	1944 (S 19)	B
52	高等女学校	家事一・家事二 (前・後)	1946 (S 21)	C
53	高等女学校	家政	1946 (S 21)	C
54	青年学校	青年家庭巻一・二・三 (本科用)	1944 (S 19)	B
55	青年学校	青年家庭巻一・二・三 (本科用)	1946 (S 21)	C

A：大正から昭和戦時期以前，B：戦時期，C：暫定教科書。

を次にあげる。「従来居間といふ語は、又お居間などと呼んで、主人の日常起居する室を指し、家族たちの室をこれに対して部屋といったのが、ここにいふ居間は、英語のリヴィングルーム (living room) と同じ意味に、家族の日常集つて生活する室を意味するのである。即ち従来の茶の間に当り、昔風の農家でいへば、台所の炉を中心とした部分がこれに当る。居間は家族の集つて生活し、食事を共にする室で、時には親しい来訪者の応接にも用ひられ、裁縫や洗濯物のアイロンかけなどもこの室で行はれるのが一般である。(後略)(資料番号 27：上巻・第一篇住居・第十三章主要各室・居間 (茶の間)，pp. 55-57, 昭和 3・1928 年)」

さらに、食堂、あるいは食事の場における子どもの教育についての記述内容がみられた。以下に一例を示す。「子供の居間を設けざるときは、ここに偉人・賢婦等の肖像を時々取りかへてこれを掲げ、食事中若しくは食事後これに関する伝記・逸話等を話し聞かしめて、自然に教訓を与へ、若しくは博聞図等を掲げて地理・理科等の知識を与ふるやうにせば一層宜しかるべし。(資料番号 16：上巻・第一章住居・第三諸室の配置設備及び装飾・二諸室の設備及び装飾，pp. 14-15, 大正 9・1920 年)」

2) 食生活領域における記述内容

献立作成時の注意点を述べた項目では、栄養だけでなく、嗜好の満足や一家団らんについても考慮に入れるべきことが次のように表現されている。「殊に食物を味ふは一種の快樂にして、単に栄養を目的とするのみにあらず。晚餐の如きは、家族団欒して、相親睦すべき好機会なれば、栄養上に害なき限りは、其の嗜好を満足せしめて、(後略)(資料番号 3：前篇・第三章飲食物・調理・第五節献立・四、嗜好に適せしむべし，pp. 170-171, 大正 2・1913 年)」

食事全般の注意点を述べた項目では、「又、三度の食事中 1 回を主饌とし、他は簡単なる献立をするをよしとす。この時は、必ず家族皆相集まりて愉快に飲食・談話し、たとへば晚餐を主饌とすれば、朝及び昼は簡略にするが如し。(資料番号 15：上巻・第二章食物・第十食事の心得，pp. 66-67, 大正 9・1920 年)」のように、1 日 1 回は必ず家族全員で団らんしながら食事をとることを推奨する記述がみられた。

また、「食事の心得」には、以下のような食事時刻を一定にすることの利点と家族の団らんを結びつけた記述が多かった。「一、食事時刻を一定にすべし。一定の時刻に一家族が同時に食事することは、(一) 衛生上大切なのみならず、(二) 一家の団欒を助くる

上より考ふるも、(三) 一家の秩序を保つ上より考ふるも亦極めて大なり。(資料番号 11: 上巻・第 4 章食物・第 8 節献立・四食事の心得, pp. 165-167, 大正 6・1917 年)」

「食事の意義」について述べる項目においては、「殊に、食物は生命を維持する上に直接の関係を有するばかりではなく、精神に慰安を与へ、食事を共にすることによつて自他の精神の融合を促進することも大である。(資料番号 30: 上巻・第三篇食物・第一章食物の使命・人生と食物, p. 109, 昭和 5・1930 年)」のように、食事の精神的機能に言及している。

このほかに、住生活領域と同様に子どもの教育に言及したものがあつた。「現に家族は終日の奮闘を卒へて、主婦の心を用ひたる晩食を味ふと共に団欒の楽しみを取り、知らず識らぬ間に愛家の情を養はれ、小児は作法習熟の基を作るを得べし。食事の前には小児に手を洗はしむる習慣を与ふべく、食事の際には趣味ある談話を交換すべし。(資料番号 14: 上の巻・第四章食物・第一食物の必要・快楽の原, p. 82, 大正 8・1919 年)」ここには「主婦の心」というジェンダー的表現もみられ、特徴的内容の 1 つとして抽出した。主人が外食するのは主人だけでなく主婦の責任も軽くないといった内容(資料番号 1)もジェンダー的表現の 1 つである。また、登場頻度は低いが、一家団らんしながら食事をとると消化によいといった表現もみられた。

(2) 文部省著作家事科教科書

文部省著作家事科教科書については、以下、対象教科書ごとに記述内容の概要を示す。

1) 小学校・国民学校向け文部省著作教科書

大正 3 年から発行の理科家事教科書には総論がなく、全体的に食の比率が高い(資料番号 46)。昭和 8 年から発行の小学校家事教科書には「女子と家事」という総論が加わり、家庭管理は一国の盛衰に関わるといった軍事色が加わる。その一方で、カレーライス、フライ、サンドイッチ等の洋食が調理内容に加わり、大正デモクラシーの影響が伺われる(資料番号 47)。これら 2 点には、「一家団らん」と「食事の共有」、いずれの記述も抽出されなかった。

昭和 19 年発行の国民学校向け教科書は、それまで学年ごとに分冊だったのが、一冊になり、昭和 8 年から発行されたものと比較すると大幅な内容の減少がみられる。とくに食領域は調理各論が姿を消し、戦時下で食糧不足だった当時の食事情を反映していると

考えられる。「日常生活の向上」と題された章に、次のような文章がみられる。「世に最もうるはしく最も幸福なものは、一家の団欒であります。一日の心身の疲れもこれによつていやされ、明日の活動力もこれによつて養はれ、さらに元気を新たにして、お国のために働くことができます。一家団欒といつても、ただ家族がより集まつて楽しむことだけではありません。身は遠く離れていても心は通つて、喜憂をともにし、苦楽を分けあひ、心をそろへて、めいめいその職分を楽しみつつ暮らしあふところにも、また一家の団欒があります。問 遠く離れた家族のものに、蔭膳を供へるのは、どういふ意味でせうか。(資料番号 48: 十一、日常生活の向上, p. 137, 昭和 19・1944 年)」離れていても心を通じ合い団らんを行うことを述べるなど、家族が戦場に赴く当時の様子が伺われる。「蔭膳」という言葉から、食事の場での団らんが前提となつていふと考えられる。

昭和 21 年発行の暫定教科書は、第一学年用・第二学年用に分かれ、19 年発行の教科書と比較すると内容が増加している。調理各論が復活しているが、当時の食事情を反映したものであり、蒸しパン等の献立のほかに、非常時の食料、炊き出しについての項がみられる。「食卓での家族団らん」については、昭和 19 年の教科書にもみられた「日常生活の向上」の中の記述に加えて、第二学年用の主婦の任務の章でも、その重要性が述べられている。「主婦が齐家の実を挙げるには、家庭生活の安定充実をはかつて、家族の保健を全うし、一家団欒、挙げて毎日の勤労と奉仕にきはひたつ活動力を養はなければなりません。家族の保健は、衣・食・住の日常生活の適否によることが多く、一家の団欒は食事を中心とする場合が多いものです。わけでも調理に於ける主婦の頭脳と技量は大きな働きをするのであります。(資料番号 49: 第二学年用・第四主婦の任務, p. 66, 昭和 21・1946 年)」とある。

2) 高等女学校向け文部省著作教科書

昭和 18 年、昭和 19 年に発行された戦時期の教科書を見ると、昭和 18 年は「食事の意義」、昭和 19 年は「食事の目的」の項に、同様に栄養をとることのほか一家揃つて楽しく食事をする精神面の重要性が強調されている。以下に一例を示す。「食事によつて健康を保つことは、個人としても必要であるが、その結果は国の活力に関係する。国のためにより多く働き、国の子をより強く育てるためにも、食事には大切な使命がある。殊に、今日のわが国のやうに旺盛な活動と偉

大正・昭和前期の家事科教科書における「食卓での家族団らん」

大な発展とをつづけていくためには、特に重要である。この点で食事にはまた国家的な意義がある。その上、食事は人生の大きな感謝であり、慰安でもある。われわれ日本人の米に対する態度はいふまでもないが、米だけでなく、どんな食物でも天地の恵としていただいている。また、一家そろって心づくしの食事をいただくときの楽しさはいふまでもない。このやうな点から、食事は体の糧であると同時に、我われの心の糧ともなっている。随つて、食事にはまた精神的な意義があるのである。(資料番号 50: 六食事と手伝・(一) 食事の意義, p. 51, 昭和 18・1943 年)」

また、それ以外に、昭和 18 年には「家庭の和」、昭和 19 年には「一家団欒」という章が設けられており、家庭の和の重要性が指摘されている。昭和 19 年ではとくに、食事の場に限定するものではないが、一家団らんが家族の和を深めるのに重要な手段であることが説かれている(資料番号 51)。

暫定教科書については、『家事一・二(資料番号 52)』は、国家主義的記述が除かれているが、「食事の目的」と「一家団欒」は、昭和 19 年発行教科書(資料番号 51)とまったく同じ記述がみられた。また、『家政』においては、「子女の家庭教育」の項に、「家はまた、和合・団欒の生活であります。(中略) 食事にしても、一家のものが親しみながら取るものは一層身に付きます。(資料番号 53: 『家政』・第一家政の本義・二家政の領域, p. 2, 昭和 21・1946 年)」との記述がみられた。

3) 青年学校向け文部省著作教科書

青年学校の家事科教科書は、全体的に戦時色が濃く、戦時下の実生活に即した内容である。「食事」の節では、当時の食生活を伺わせることばをまじえて、以下のように、精神面の意義が強調されている。「祭祀にともなふ食事や親戚・知友の会食の時はもとより、毎日の家庭の食事は一家団欒のよい機会でありますから、たとひ美味に乏しくとも、互いに心をつにして感謝と和楽の気分を豊かにすべきで、不作法な食事をして相手の人を不愉快にしたりすることは、忙しければ忙しいほどつつしまなければなりません。出征中の家族の一員にも蔭膳を供へるわが国のならはしは、何といふゆかしい家庭食事の心がけであります。(資料番号 54: 巻一・第三章勤労と食物・第二節食事, pp. 55-56, 昭和 19・1944 年)」

暫定教科書は、総論の目次のみが「大東亜戦争と女子の任務」から「新生日本と女子の任務」と書き換え

られ、その章の部分 14 ページまでが削除されて、落丁となっている。「食事」の節は昭和 19 年発行の教科書と同じ文面で、「出征中の家族」が「旅行中の家族」に書き換えられていた(資料番号 55)。

5. まとめと考察

(1) 高等女学校家事科検定教科書にみる「食卓での家族団らん」の傾向

前述の住居領域 4 項目、食物領域 7 項目の特徴的内容を分析視点として、各教科書の結果をまとめたものが表 3 である。39 点の教科書から「食卓での家族団らん」に関する記述が抽出されている。記述がなかったものは 6 点であるが、昭和に入ってから教科書に多い。食事室の説明において「食卓での家族団らん」の重要性を説く記述が 35 件あり、もっとも多かった。これらの記述は、明治期の家事科教科書には多くはみられなかったが、家事科教授要目が改訂されたことにより、増加したと考えられる。高等女学校の家事科教授要目の住生活領域は、明治 36 年、「住居」「選択土地、家屋 方向、採光、暖房、換気、室房ノ配置、装飾、門塀、庭園、井 掃除、保存、家具、什器」とある。しかし、明治 43 年の高等女学校令施行規則中改正に伴い、明治 44 年の教授要目では、「家内の整理」「住居の修理・保存 掃除 室内ノ設備 衣服什器ノ選択・保存及整頓 装飾 戸締 火ノ用心等」とされた(文部省教育調査部 1941)。したがって、多くの教科書に室内ノ設備・装飾として、各部屋の説明が詳述されるようになったものと考えられる。

次いで、多く抽出されたのは、個人の膳にかえて、家族が食卓を囲むことを奨励する記述である。対象とした家事科教科書には「チャブ台」という言葉は見出されず、「飯台」「卓」「食卓」が使われている。「とくに食堂といふ程のことはなくとも、従来の茶の間に卓をおき椅子を備ふるか、或は飯台をおき、家族彼を囲みて食事をなさば、団欒の楽を得べく、又一人づつ配膳するの労を省き便利なれば、この風大に行はるるに至れり。(資料番号 6: 上巻・第二篇住居の整理・第二章室内の設備及び装飾・一各室の設備と装飾・食堂, pp. 31-32, 大正 4・1915 年)」などの記述から、大正初期のこの時期に銘々膳からチャブ台への移行が行われていたことが伺われる。

また、家事労働の合理化と結びついた食卓の奨励は、明治 22 (1889) 年に既に家事科教科書に見出されているが(表 2001) その後、高等女学校家事科検定教

表3. 高等女学校家事科検定教科書にみる「食卓での家族団らん」に関する記述

資料 番号	発行年	記述 なし	住生活				食生活						
			食事室 条件	食卓 奨励	居間と 兼用	子ども 教育	嗜好 重視	1回は 団らん	時刻 一定	主婦心 尽くし	精神的 機能	子ども 教育	消化の 助け
1	T 2		○							○			
2	T 2		○		○								
3	T 2		○				○						
4	T 2		○	○									
5	T 3		○										
6	T 3		○	○									
7	T 4		○			○							
8	T 4		○	○									
9	T 5		○			○							
10	T 5		○	○									
11	T 6								○				
12	T 6		○			○							
13	T 7		○				○	○	○			○	○
14	T 8		○	○				○	○			○	
15	T 9		○					○					○
16	T 9		○	○									
17	T 13							○	○				
18	T 14	○											
19	T 14		○	○									
20	T 15		○										
21	T 15		○									○	○
22	S 2		○	○				○				○	
23	S 2		○	○				○		○		○	
24	S 2	○											
25	S 2		○		○								
26	S 3		○		○								
27	S 3		○		○				○			○	
28	S 3		○						○				
29	S 4		○										
30	S 5		○								○		
31	S 5		○						○				
32	S 5												
33	S 6	○											
34	S 7		○										
35	S 8	○											
36	S 8		○							○	○		
37	S 9		○										
38	S 10		○					○					
39	S 12	○											
40	S 12		○							○	○		
41	S 13		○		○								
42	S 14												
43	S 15		○										
44	S 15	○											
45	S 18										○		
合計		6			34					17			

大正・昭和前期の家事科教科書における「食卓での家族団らん」

科書においては、明治42年発行の甫守ふみ著『実用家事教科書』にみられるのみである（表1998）。大正に入って、食卓が生活の中に徐々に浸透し、人々の知るところとなったことが推察できる。

昭和に入ると、食卓の奨励は影を潜め、既に食卓の普及が前提となっている。食堂の設備として、「食卓（資料番号30：p.20，昭和5・1930年など）」あるいは「食卓を中心として小椅子（資料番号28：p.62，昭和3・1928年）」があげられるようになる。さらに、椅子式の推奨（資料番号33：p.110，昭和6・1931年）も現れる。「（前略）（三）近来、洋風の椅子式に改める風があるが、その場合には、充分広さを用意して、食事の場所と分離し、休養に適する気持のよい椅子や、テーブルを備へ、壁の色や、敷物に就いても、家族の慰安に適するやうに、工夫しなければならない。（資料番号38：上巻・第一篇住宅・第四章住宅の設計・第九節各室・四茶の間，pp.21-22，昭和10・1935年）」からもわかるように、一部の家庭とは思われるが、椅子式テーブルの普及を示す言説も登場し、挿絵もみられる（資料番号40：上巻，p.22，昭和12・1937年など）。

食生活領域のなかで多く抽出されたのは、毎日の食事3回のうち1回を主饌として家族揃って楽しく食事することを奨励する記述、および食事時刻の一定化を喚起する記述である。前者は明治期から多くみられた内容である。後者の「家の秩序」とともに述べられていた食事時刻の一定化は、大正期の家事科教科書において、規律目的で時間の管理方法を教える記述が多く抽出された研究と一致する（佐藤2004）。

このように、一定の時刻に家族揃って同時に食事をするための奨励が複数なされていた背景には、現実には、時間と場所を含めて、家族ばらばらに食事がなされる家庭が多くあったことを物語っており、次の記述からもそれを推察することができる。「家風によりては今は主人・主婦及び老人などは各々その居室に於て、別々に食事する家もあれど、多くは家族団樂し一の食堂に会して食事を共にする風、都鄙ともに行はるるが如し。誠によき風潮といふべし。（資料番号3：前篇・第一章室内の整理・第五節装飾・三食堂（茶の間），pp.58-59，大正2・1913年）」

1919（大正8）年の文部省による「国民生活に関する三訓令」を端緒とし、大正末にかけて文部省が社会教育の一環として主導した生活改善運動は、家事科教育にも影響を及ぼしている。文部省の外郭団体である

「生活改善同盟会」の調査決定事項を付録として掲載する教科書（資料番号40，昭和12・1937年）もみられた。居間と茶の間を兼用、3回の食事の1回に重点をおいてその他は簡素に、時刻を一定にするなどの家庭生活の規律や合理化と食卓での団らんを結びつけた記述は、大正の初めから昭和3年ころまでに発行された教科書から多く抽出されている。明治期の婦人雑誌、総合雑誌における「食卓での家族団らん」に関する研究では、雑誌、および教科書における記述内容に関連がみられた（表2006）。羽仁もと子は、明治41年創刊の『婦人の友』のなかで、主婦主導による生活管理と家庭の団らん、家事の合理化、科学的な育児をくり返し説いたことが知られている（西川1990）。このような雑誌記事が、大正8年の文部省訓令以前の教科書の記述内容に影響を及ぼしていたことが考えられる。

個人の膳を用いて家族ばらばらに食事をし、「食卓での家族団らん」が人々の生活とはかけ離れた明治期には、家事科教科書における教育は、民主的家族実現のため、あるいは国力増強のための家制度の強化と目的の違いはあるものの、「家族和楽」のための「食卓での家族団らん」普及がねらいであった。大正期には、膳とチャブ台の交替、食事室の整備など、物理的要件が整いつつあったために、「食卓での家族団らん」のための要件、あるいは機能の内容が、より具体的に描かれたものと考えられる。前述のように、チャブ台への切り替えは、都市部では大正末年、農村部では昭和9年ごろがピークとされる。昭和4年を過ぎたころに、具体的要件、機能に関する内容が抽出されなくなったのは、現実には依然食事中の会話を禁止する家庭は多かったものの（石井等1991；井上1999；熊倉1999）、チャブ台の普及、食事は家族揃って楽しく行うべきという意識の普及も進んで、具体的要件や機能について詳述する必要度が減少したためではないだろうか。石毛等の聞き取り調査によると、チャブ台を用いていた家庭では、食事中話してもよかったケースは「静かにならよい」を含めると半数あり、「会話を厳禁」する家庭を上回っていた（石毛等1991）。チャブ台の普及は都市部で先行し、都市部の新中間層の妻は、高等女学校出身の者が多かった。明治期から大正期、昭和前期の高等女学校家事科検定教科書における記述内容と、チャブ台普及との連動を考え合わせると、高等女学校における教育が「食卓での家族団らん」の実現に少なからず影響を及ぼしていたことを推察することができる。

(2) 文部省著作家事科教科書にみる「食卓での家族団らん」の傾向

文部省著作家事科教科書では、高等女学校家事科検定教科書にみられるような住居における各室の説明がなく、住生活領域からの「食卓での家族団らん」に関する記述はまったく抽出されなかった。記述が抽出されたのは、主に食生活領域、および家庭管理領域である。記述から析出された特徴的内容は、以下のとおりである。① 食事の精神的意義、② 団らんしながらの食事は身につく（栄養的意義）、③ 食事に感謝の気持ちが重要、④ 蔭膳を供える、⑤ 主婦の技量の重要性（表4）。

高等女学校向け教科書には、食事の精神的意義が強調されると同時に、感謝の気持ちを持つことの重要性が語られていた。また、青年学校向け教科書には、「たとひ美味に乏しくとも」といった言葉がみられるなど、当時の食糧事情を反映して栄養面の重要性の主張が難しく、その反動で精神面がより指摘されたことが考えられる。国民学校向け教科書では「一家団らん」がとくに奨励され、「身は離れていても心は通つて」、「蔭膳」を供えて食事を共にするといった特殊な状況下での「食卓での家族団らん」が描かれていた。

(3) 家事科教科書における「食卓での家族団らん」に関する記述と時代背景

本研究では、大正2（1913）年から昭和21（1946）年までの34年間の教科書を対象としている。この34年間は、大正デモクラシーの時代から昭和6（1931）年の満州事変に端を発する戦時体制、太平洋戦争、および戦争終結時まで、きわめて変化の激しい時代であっ

た。各時代背景と教科書記述の特徴との関連について以下にまとめたい。

日本における「食卓での家族団らん」イデオロギーは、キリスト教主義に基づく近代的家庭論から生まれ、その後、家規範の教科に利用されたことが明らかになっている（表2006）。大正期の記述からは、家族の精神的結びつきに関する内容は析出されていないことから、大正デモクラシーと呼ばれる民主主義思想の影響を直接受けて、家族の団らんが強調されたとはいえない。工業化、および大正3（1914）年からの第一次世界大戦勃発後の好景気に影響された都市への人口流入により生まれた核家族を中心に広まった、生活の合理化・科学化の家政思想との関連が色濃い。

大正6（1931）年から太平洋戦争勃発までの戦時体制下は、教科書全体をみると年次経過とともに図表や挿絵も増え、記述内容も科学的になる。「食卓での家族団らん」に関しては、食事室の条件は一貫してみられるが、食卓での家族団らんのための具体的要件、具体的機能を述べた記述は、多く抽出されなくなる。かわって、食事の精神的意義や、主婦の心尽くしの重要性を述べた、精神面を強調した記述が比較的目立ち、戦時下の影響を感じさせる。

昭和16（1941）年にはじまる太平洋戦争下には、食事と国力とを直接結びつける、以下のような文言があらわれる。「食事によつて健康を保つことは、個人としても必要であるが、その結果は、国の活力に関係する。（資料番号45：六食事と手伝い・（一）食事の意義、pp.50-51、昭和18・1943年）」また、戦局が悪化する昭和19（1944）年には、食糧不足を精神面

表4. 文部省著作家事科教科書にみる「食卓での家族団らん」

資料 番号	発行年	記述 なし	特徴的内容				
			精神的意義	栄養的意義	感謝	蔭膳	主婦
46	1914 (T 3)～	○					
47	1933 (S 8)～	○					
48	1944 (S 19)		△			○	
49	1946 (S 21)		○				○
50	1943 (S 18)		○		○		
51	1944 (S 19)		○		○		
52	1946 (S 21)		○		○		
53	1946 (S 21)		○	○			
54	1944 (S 19)		○			○	
55	1946 (S 21)		○			○	

大正・昭和前期の家事科教科書における「食卓での家族団らん」

で補う表現や、「蔭膳を供える」という特殊な状況下での団らんが語られ、戦争の影響を直接受けていることは先述したとおりである。太平洋戦争時は家庭教育が「皇国民練成体制」の根源として位置づけられ、国家による家庭教育への強力な介入、統制が行われた(斉藤 1987)。家事科教科書もその影響を受けていたことが推察できる。

戦争終結時の暫定教科書における記述は、太平洋戦争下と同じ文面が使用され、国力増強のための家族団らんは、戦後、民主国家構築のための家族団らんにすり替えられたことが伺える。

戦時体制下における軍事目的の「食卓での家族団らん」に関する教育が、第2次世界大戦後の占領期を経て、どのように新体制における教育につながっていくのかを明らかにするのが今後の課題である。また、今回の調査では、食卓での家族団らん実現の物理的要因のうち、家族が揃う時間的余裕についての記述は見出されなかった。時間的余裕が食卓での家族団らんに及ぼした影響を、産業構造の変化との関連も考慮に入れながら、今後、教科書の記述から明らかにしたい。

引用文献

- 平井滋野, 岡本祐子 (2001) 食事の中の会話からみる家族内コミュニケーションと家族の健康性および心理的結合性の関連の検討, 家族心理学研究, **15**, 125-139
- 井上忠司 (1999) 食事空間と団らん, 『講座食の文化 食の情報化』(井上忠司編), 農山漁村文化協会, 東京, 104-119
- 石毛直道 (2005) チャブ台の時代, 『食卓文明論 チャブ台はどこへ消えた?』, 中央公論社, 東京, 143-166
- 石毛直道, 井上忠司編 (1991) 国立民俗学博物館研究報告別冊 現代日本における家庭と食卓—銘々膳からチャブ台へ—
- 川崎末美 (2001) 食事の質, 共食頻度, および食卓の雰囲気は中学生の心の健康に及ぼす影響, 家政誌, **52**, 923-936
- 小西史子, 黒川衣代 (2000) 親子のコミュニケーションが「心の健康度」に及ぼす影響, 家政誌, **51**, 273-286
- 熊倉功夫 (1999) 食事作法の変化, 『文化としてのマナー』, 岩波書店, 東京, 29-62
- 文部省教育調査部 (1941) 『高等女学校関係法令の沿革』
- 西川祐子 (1990) 住まいの変遷と「家庭」の成立, 『日本女性生活史 第4巻近代』, 東京大学出版会, 東京, 36-37
- 小笠原清信 (1971) 家庭科(家事・裁縫)教育, 『日本近代教育史事典』(日本近代教育史事典編集委員会編), 平凡社, 東京, 375-381
- 表 真美 (1998) 明治期高等女学校家事科検定教科書における食事の共有と団欒, 家政学原論, **32**, 82-89
- 表 真美 (2001) 家事教科書に見る家族の食事と団らんに関する教育に関する史的研究—明治20年代までの家政書を中心に—, 家政学原論, **35**, 38-47
- 表 真美 (2006) 明治期婦人雑誌, 総合雑誌における「食卓での家族団らん」, 家政誌, **57**, 369-378
- 斉藤利彦 (1987) 「家」と家庭教育, 『総力戦体制と教育』, 東京大学出版会, 東京, 282-302
- 佐々木享 (1993) 『文部省著作家庭科教科書別巻』, 大空社, 東京
- 佐藤裕紀子 (2004) 明治・大正期高等女学校の家事科教科書にみる時間教育, 家科教, **47**, 223-235
- 田中陽子 (2003) 大正後半期から昭和初期小学校裁縫科教材論, 家科教, **46**, 207-215
- 常見育男 (1959) 『家庭科教育史』, 光生館, 東京